会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和3年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」  （２）教職員の資質能力向上の推進①効果的な教育成果②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第3回ICT活用研修WG |
| 開催日時 | 令和3年10月4日（月）　10時00分～12時00分 |
| 場所 | オンライン開催 |
| 出席者 | 事業責任者：高岡　信吾  委　　　員：猪俣　昇、岡村　慎一、合田　美子、長瀬　あゆみ、  計6名  請負業者：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　　　　計1名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計7名 |
| 議題等 | 1. 研修実施に向けた追加・変更点などについて（猪俣）   ・スケジュールについては、現在深堀調査3件のうち1件石川先生が9月末に終了した。  (1) アダプティブラーニングの定義について  ・ICTツールを活用して学生一人ひとりに対応した学習目標が達成できること主旨として定義としている。  (2)研修到達目標、評価、研修方法  ・今年度の研修では過去の研修で対応済みの授業設計・eLコンテンツ以外すべてのアダプティブラーニングに必要な要素について触れる予定。  ・研修到達目標については、事業計画書の目標の詳細ということで（1）と（2）にあげている。  ・研修目標到達の評価は検討中。  ・研修方法については、事前課題、対面研修当日、事後課題の3段階に分かれている。事前課題では動画教材を作成し課題図書に関するレポート課題を検討している。対面研修当日は6時間を予定し、①学生記録をICTを使って収集　②コミュニケーション理論　③ケーススタディをそれぞれ違う講師が担当する。講義は三類型を使用し、収集データ、勇気付けコミュニケーションの重要性を、事例を活用し解説する。実習は、Googleで形成的評価データを集める、一覧化して俯瞰することができるようになるように研修で実習する。現時点でQ1～Q3まで評価についてあげているが、今後の深堀調査の結果で内容を変更する可能性もある。勇気付けコミュニケーション理論解説　についてはコーチングの理論を打ち出して講義をする予定。ケーススタディでは深堀調査の結果で必要と思われるラーニングポイントについて演習を実施。ケーススタディの進め方はまだ仮定としている。個人ワーク、グループワーク、発表、フィードバックの流れを考えている。スライド16・17はケーススタディのイメージとなっている。  ・研修当日の最後chapter6でGoogleを使ったデジハリ、山野美容芸術短大のコミュニケーション事例解説をする予定。  ・ICTを活用したコミュニケーション方法に関する動画教材の内容については章立てを含め現在検討中。  ・事後課題については、当日の研修で学んだことを現場で再現してもらい、その結果を検証する内容を考えている。  (3)深堀調査について  ・深堀調査については対象校3校。石川先生については、事前依頼と当日面談の2段階を一緒に実施した。  ・診断的評価データは科目開始前の興味、既有知識、形成的評価データは科目過程のアンケート結果や確認テスト結果、制作物、日報的な学生コメント、学生質問、先生による観察記録、総括的評価データは科目の最終的な成績について収集したい。  ・事前依頼については、個別具体的な情報を集めたいと考えている。それを踏まえて当日面談をする予定。  ①9月30日（木）実施：デジタルハリウッド大学大学院 石川先生のヒアリング報告（今回のヒアリングで把握できたことなど）  ・ルーブリックを元に各種コミュニケーションを取っている。  ・学生と先生の個別のやりとりは目標設定シートをベースに実施。専門スキルがなくても学生を導けるようなシステムを作っているのが特徴。コミュニケーションツールはGoogleスプレッドシートを使用、頻度は週1回。  ・授業最初の1回目と真ん中あたりの5回目の2回、3～4分の面談を実施。  ・毎週3時間かけて授業外で50名データオンデマンド教材使用状況確認。  ・高岡先生のデジハリ院生と専門学校生の違いに関するご指摘内容が今回の調査結果がそのまま専門学校に使えない部分の大きなポイントとなっているので、石川先生の実施方法をベースにはするが、指摘内容に対応できるようなシステムを研修として作っていきたい。  ・学生同士のやり取りは、毎週毎回の授業で25分程度のディスカッションタイムを設け、学生の現状や学生同士のフィードバックなどのコミュニケーションを取れる場としている。こちらもGoogleスプレッドシートを使用し、リーダー、書記は立候補制で決め、コミュニケーションしやすい状況を作っている。同級生をフィードバックし合うことで学習意欲を自覚、成績が伸びた学生もいるとのこと。学生同士だけではなく、先生からもフィードバックをするようにしている。  ②今回のヒアリングを実施した上で、今後2校の実施に向けた課題や改善点など  ・診断的評価データ、形成的評価データ、総括的評価データをベースの残りの2校も面談を実施する予定。  ・2段階の形式をとり、事前に提供いただいたデータを委員で共有・確認の上、面談としたい。  ・本日のWGを踏まえ2校に日程などの打診をする。  ・よりスムーズに聞きたいことを聞けるように、欲しい情報を明確に伝える。  【意見等】  ・残りの2校では、専門学校とのギャップをどのような工夫をして埋めているのか、ただギャップの問題は常に課題で、完全な回答は無いと考えるが、それでも先進的に、バランスの良い取り組みが聞けるとよい。（高岡）  →自分の今までの経験などを考えながら調査動画を拝見したが、主体的に学ぶ姿勢がある学生は少しのサポートで自ら立ち位置が分かり目標を設定することができるが、現状対応している学生は、なんとなく入学した、働きたくないから入学したという、教えてもらうのが当たり前の状態。でも社会に出ると自ら学ばなくてはいけなくなり大きなギャップとなるので、専門学校で主体的に学ぶことができる学生の育成が必要だと感じた。専門学校の売りは少人数制、担任制、手厚いサポートがあるということだが、モチベーションが低く、勉強の仕方が分からないというような学生の対応に追われてしまう。半面モチベーションが高く、学力が高い学生を伸ばすためにもアダプティブラーニングが必要だと実感した。スプレッドシートの活用はとても勉強になった。ペーパーベースではなくデータで学んだ内容を記録するだけではなく、振り返りや気付きを入れることで学生の学びも深まるのではないかと感じた。（長瀬）  →専門学校生は総体的に低意欲、また目標を明確に持った学生が少ないが、石川先生は学習到達像を持たせるようにしているが、専門学校では学習到達像を持たせるというよりも違う目線で対応をしている。そこが大きな差だと感じた。また意欲に関しては決して専門学校生が劣っているわけではなく、同じ悩みを抱えながら対応しており、より良くしていくために実施している取組に差を感じた。（高岡）  →大学院生・大学生だから優秀というわけではなく、就職のため、特に中国の留学生などは修士を取るために受け入れやすい日本に来ているだけという場合もある。逆に専門学校生は礼儀正しくまじめな方が多いと感じている。先生側で「何をするか」を学生が持つ興味から引き出して目標を持つことに繋げていけると学生のやる気を引き出せるのではないかと考えている。これは大学だからというわけではなく専門学校でも可能なことだと考えている。（猪俣）  ・石川先生の全てを取り入れるのは難しいと感じるので、自分事にするためにも、自身の授業でどのような形で取り入れられるかを考るというワークを研修に組み込めると良いと感じた。（合田）  →具体的なことはまだ決まっていないが、ヒアリング調査で得られた先生方のノウハウの中から、自身の授業の改善に差し替えられるノウハウを選ぶというパーツ的なイメージを持っており、合田先生のおっしゃるように考えている。（猪俣）  ・専門学校には丸ごと反映することはできないが、石川先生の大学院というセグメントの学生に有効なプロセス管理のためのルーブリックとして有効な手法だと感じているので、専門学校に一つの事例として紹介できると感じる。自ら学び続ける学生の育成のために指針としてルーブリックを使った評価軸で自己管理ができ、メンターである教員の声掛けが有効だということを事例紹介や、学生の階層によって有効な手法として示せるかと考える。自分事にするために授業改善に繋がるセッションも必要かと思う。（岡村）  ・石川先生のノウハウを中心とすると、オンデマンド授業前提など環境の違いで受講者が止まってしまう可能性もあるが、それをどう先に進めていくか考えていく機会になるのもありかなと考える。答えを全て用意することは難しいが、石川先生のルーブリックは学生の学習行動にポイントを置いているので、どの科目でも当てはめることができる。考えているよりはスムーズにスタートができると考える。（高岡）  →出来る限り様々なケースにフィットする組み立てのための深堀調査と考えている。様々な事例、先生方の悩みも含めどうフィットさせるか再セットしたい。（猪俣）  ・学習評価WGの研修では非認知能力の評価でルーブリックの作成方法のプログラムを考えている。ICT活用研修ではルーブリックの作成方法は扱わないが、全専研の研修プログラム開発としてお互い連動性を持つと良い。（岡村）  →植上先生と情報交換・打ち合わせをセッティングする。（猪俣）  ・専門学校の強みを残し、下位層の学生を引き上げつつ、上位層の学生をより伸ばしていく対応も考えた場合、どのような授業改善をしていけばいいのか、落としどころが重要だと考える。（高岡）  →今回の研修到達目標では、学習に対する意欲が低い学生、自立学習が苦手な学生への対応するためのコミュニケーション理論の理解とコミュニケーションスキルの習得としており、下位層の学生をターゲットとしてヒアリングを進めている。（猪俣）  →石川先生のノウハウは上位層がターゲットになるように感じる。下位層ターゲットであればICTツールを活用したコミュニケーション方法にクローズアップする必要があるのでは。（高岡）  →その認識でいる。石川先生の授業の中で下位層の学生をコミュニケーションなどどのようなアプローチをしたか事例を聞かせていただいたので、目的は達成できているかと思う。（猪俣）  →教員側が学習に入る前の目標設定指導ができていないので、学生の意欲に違いがあると思うが、目標設定をすることの大切さなどを考えて指導するかしないかなど現場の教員間で温度差を感じる。まずはその目標設定の指導の重要性の認識やスキルが必要だと感じる。また下位層の学生への対応を学ぶことで対応にかける時間が少なくなり、時間が空いた分、上位層の学生の対応ができるのではないかと考える。（長瀬）  →「何をしたい」と目標をもって入学すると具体的に設定していけるが、専門学校生はほとんどそれに該当しない。シラバスに則ったある意味一方的な教育で、学生個別で目標設定はしていないため、目標設定＝シラバスではない。石川先生の話は専門学校には高度なノウハウだと感じたので、下位層の学生を、ICTツールを活用してどう効率的に導くかというところに繋がりにくかった。（高岡）  →石川先生の授業は低意欲の学生を引き上げるメソッドがふんだんに入っているわけではないが、自分事にするような仕掛けを入れて意欲の低い状態をあげる仕掛けにICTを活用しているので、コミュニケーションに関するパートについては石川先生のノウハウでは難しい部分があると感じる。石川先生のパートはICTを使ったコミュニケーションのツール事例としていろいろなものを紹介し、それをどう組み合わせて自身の授業に取り入れられるかをアウトプットすることを最終的なゴールとし、下位層の学生とのコミュニケーションについては専門である中田先生にお願いしたほうが良いかと考えるがどうか。（猪俣）  →専門学校では話題が家庭環境まで及ぶことがあるのでガイダンスの時間が長くなったりする。その部分をICTの活用での学生の状況把握やガイダンスでの導き方で弱めることができればよい。（高岡）  →教員のコミュニケーションの意識改革を促す方がいいのか、今までのコミュニケーションを大事にしつつICTの導入やコミュニケーションスキルを身に付けることで効率化を図り学びにフォーカスした方に寄せるのか、となると後者の方ということで良いか、委員内で意識を統一したい。また石川先生のヒアリング後に中田さんとまだ話ができていないが、学生の意欲・主体性を伸ばすスキルを身に付けるようなコミュニケーションに手法を中田さんにお願いしたいと考えている。（猪股）  ・研修到達目標のターゲットは当初と変わらず下位層の学生に対応するためのコミュニケーションとする。他2校のヒアリング結果を含め、研修にどのように反映するかが課題。学生との連続したコミュニケーションに適したICTの活用方法やガイダンスのコミュニケーション手法としてヒアリングで得られた好事例を反映したい。また、他の研修との関連性や位置付けを明確にする。（猪俣）  →やり方はいくつかあると思うが、ICTの活用事例を紹介して、自身の授業でどのような形で取り入れられるかを考えることで授業を見直せると良い。紙ベースでもいいとは思うが、ICTを活用することで記録が保存できる、負担軽減ができるという効果を感じてもらえると良い。可能であればフィードバックのテンプレート化、その応用方法など負担軽減につながるTipsを伝えられると良い。（合田）  →ICTを取り入れること自体が面倒、うちでは取り入れられないというマイナスな考えは改めないといけないとは思うが、事例の紹介がいくつかあると選択肢が増え、事項に合うようなものが出てくるのでは。学生に対しても「見てるよ」という教員と学生の繋がりが伝わるコミュニケーション方法が学べると良い。また、事前学習の課題とケーススタディが繋がると落とし込みやすいのではないかと感じた。（長瀬）  →合田先生のおっしゃった、ツールを活用するいろいろなアラカルトを提示し、受講者がマッチングしたものを使用するというプログラムはなるほどと感じた。コミュニケーションに使うICTで、発信者と受信者、記録してどう活用するかのコンテンツを組み込むと良いと感じる。学習目標の特性に応じて記録の仕方・ツールの活用方法が違うので、受講者に気付いてもらえると良い。（岡村）  →現状十分できていると思っていることでも、ICTツールを使うことで効率化や負担軽減などさらにメリットがあるという具体例を提示すると、今までできなかった指導方法に繋がり、下位層の学生への対応などになるのではないかと感じた。（高岡）  →教員のコミュニケーションの意識改革を促す方がいいのか、今までのコミュニケーションを大事にしつつICTの導入やコミュニケーションスキルを身に付けることで効率化を図り学びにフォーカスした方に寄せるのかどうかは、早めに検討・設定する。また、提示するアラカルトについては事例があったもの限定にするかどうか検討する。（猪俣）   1. 次回ICT活用WGについて   ・第4回ICT活用研修WG…後日日程調整。時間帯は10時～12時とする。  　※中田さん：11/1、15日以降OK。（2～12は参加不可）   1. その他   ・次回日程・研修日程の目途、新型コロナ第6波への対応をどうするか、ある程度明確にして進行を図ってほしい。（飯塚） |
| 配布資料 | ・第3回ICT活用WGアジェンダ  ・FY2021スケジュール\_20211006\_0914 |

以上